

肥前島原 松平文庫「千載佳句」について

金原, 理

<https://doi.org/10.15017/12281>

出版情報 : 語文研究. 17, pp. 26-39, 1964-03-31. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :



肥前 島原 松平文庫本「千載佳句」について

金 原 理

千載佳句については既に、金子彦次郎氏（註1）、川口久雄氏

（註2）など先覚の業績があり、特に後者において、現存諸本についての書誌的な追求がなされている。

川口氏は、千載佳句の諸本として、

(一) 内閣文庫所蔵甲本（浅草文庫、和学講談所旧蔵のもの）、九行書写本一冊。（以下「甲本」と略称する）

(二) 内閣文庫所蔵乙本（林家旧蔵のもの）、八行書写本二冊。（以下「乙本」と略称する）

(三) 上野図書館所蔵本、八行書写本二冊。（以下「上本」と略称する）

(四) 市河寛齋旧蔵本、存否不明。

の四本を紹介しておられる。以下松平文庫所蔵本とこれら四本のうち現存する三本との親近関係を検討し、結論においては、同じく後二条院宸翰本の流れに立つものではあるが、それらとは別系統に属する一本であることを述べてみたいのである。

一

本書（以下「松本」と略称）は二卷二冊、各冊縦二十九糎、横二〇・五糎。茶色表紙。袋綴。上巻は題簽が失われたあとに「千載佳句」と打付書。下巻は題簽は表紙左肩に位置してやゝ小さく、「千載佳句」と記す。墨付は上巻、四十三丁、下巻、四十五丁、上下ともに前後一丁ずつ白紙を有する。一面八行書。内題あり。また奥書の全文は次の五ヶ条から成っている。

(一)、或云本朝作在此中歟云々

前江納言維時撰之云々

本云
奥本表云

江納言維時撰集云々

(二)、本云 正安第二年六月十一日以前式部少輔藤原春範本校合之／

(三)、千載佳句二巻者以後二条院宸翰本写之訖奥書／曰江納言維時撰之而正安二年以藤原春範之本校合之云々故維時之傳春範之系圖考之以附左／

嵯寬文四年如月下浣

(四) 大江維時の略歴。(これは公卿補任に全く同じ。)

(四) 式部少輔藤原春範系図。(これは現在流布しているものとは食い違ふ点もあるが、尊卑分脈によつたものと思われる。)

(但し、(一)・(四)の番号は整理のために筆者が施したもの、／は改行を示す。)

さて、この奥書を先に掲げた三本と比較すると、(一)と(二)は諸本共通のものであるが、(三)以下は松本独自のものである。

松本以外の奥書は次の通りである。

(一) 乙本と上本には(一)・(二)の次に林春斎の長い跋文がある。その全文は本によれば左の通りである。

今茲之春洛書估賣二冊來其標題曰千ノ載淑佳句傳稱乾元帝宸筆也卷末細書曰江ノ納言維時撰其所纂抄皆唐詩而元白之／句過半其作意可一百五十人其詩可千ノ八十首六緊取一聯而載全篇者幾希想ノ夫公任朗詠傲此部類擇其協郢曲而加ノ本朝詩句者乎然朗詠成于後而行于世ノ此豈成於前而寥々本朝書目亦闕焉ノ蓋江家秘而珍藏遇其家門斷絶而此集ノ亦混其所傳寫幸存而在官庫染奎翰者ノ乎書估素知姫路拾遺嗜倭書而性呈之ノ拾遺使筆更寫之不日而成欣然殊甚余ノ亦有好古之癖借拾遺之本謄寫為弘文ノ院之一物由是推之則本朝之舊記有其ノ名而其書不存者或其有時而顯亦不可知ノ焉嗚呼何時有陳農之求就就思此集所ノ取唐人之句維時悉見其全集乎抑亦有ノ所傳聞乎其博瞻豈其容易乎哉方今

余ノ家唐詩數百卷有各集有類纂暇日併考ノ而知其全篇正其晦陰則千歲之同志乎ノ若夫昔傳而今不存者偶在此中則一聯ノ一句亦是中流一壺之謂乎寬文四年甲ノ辰孟夏四日弘文院林學士跋

(但し／は改行を示す。)

こゝで、乾元帝とは乾元元年(一三〇二年)に即位した後二条帝のことであり、姫路拾遺とは榊原忠次のことである。この跋文は松本の奥書(三)の記載と一部一致する。

さて、林春斎と榊原忠次と初代島原藩主の松平忠房とがきわめて親しい間柄にあったということは、中村幸彦先生が既に「文学」に發表された論文で指摘しておられる(註3)ところであり、松本千載佳句には、尚舍源忠房の印はないが、奥書に寬文四年如月下浣ともあり、たとえそれが本書の親本の奥書であつたにしても本書の書写も、それを隔たること遠いものでなく、寛文・元禄の間の書写にかゝるものであることは、筆跡その他から察しうるのである。川口氏は、上本は乙本の転写本だと考えておられるが(註4)、このことは後述の如く多少問題がある。又前述したように、松本は寬文四年二月下旬に写されたという奥書を有し、乙本は寬文四年四月四日に写されており、その間に二ヶ月の差がある。又前述の乙本の林春斎の跋文によれば、榊原忠次は寬文四年の春に後二条院宸翰本系統の一本を写している。(この本は現存しないが一応榊原本と名付けらる。この榊原忠次が写した本は二冊本であり、しかも榊原本を写した乙本が八行書二冊本である。(榊原本が八行書二冊本であつたといふことは想像に難くない。一方、松本千載佳句も前述したよ

飽情 玉茗君 園忌 閑居 閑意
 閑散 閑道 閑興 閑遊 閑喜
 閑歌 目錄 詩興 高興 感興
 感歎 懷舊 左 左人 左痛

面特第

三春

柳無氣力條先期池有波又水盡開
 今月不知誰計會春風春水一時來

早春

曉霧山巒嶺尚少穿沙蘆葦葉輕舒
 嫩合難言紫紅氣江平波泛帶碧火
 水清田地蘆難起春入枕膝柳眼低

或云本創作在此中決云

春江解言雖時候之云

本云

以時言雖時候之云

本云

或云第一字大為十日以明大始春始春本故合之

十載佳句二冬自以後二余既廢爾本字之此歷書
 曰江解言雖時候之而正年二年以歲末春始之本故合
 二之故雖時二傳春始之系屬片之以附左
 皆寬父四乎四月下記

うに、八行書二冊本である。又、前掲「文学」の論文で（註5）中村幸彦先生は忠房が集めた写本の原本の抛り所の一つに榊原忠次の文庫を数えておられる。以上のような諸点から、松本が榊原本の転写本ではないかとの疑いが濃くなるのであるが、しかしこれについては後に詳しく考察を加えて、その然らざることを述べようと思う。

(四) 甲本には、(一)・(二)以外の記載はない。しかも一冊本で一面九行書きであり、その点からでは松本との関係は明瞭ではない。

二

以下では本文の内容につき、(一)句の配列順序、(二)乎古止点の表記、(三)詩題及び作者名の記載、(四)異字、(五)送り仮名・返点の五点について比較検討を試みる。はじめに体裁、奥書などからみて松本とさわめて近い関係にあると考えられる乙本から考察していく。

第一点、句の配列順の問題とは、二一八番と二一五番とが入れ替わっていることである。即ち、甲・乙・上三本では、

- | | | | |
|-----|----------------|-----|------|
| 二一五 | 黄纈林寒有葉碧瑠璃水浄無風 | 白 | 泛太湖 |
| 二一六 | 心灰不及爐中火鬢雪多旋砌下霜 | 白 | 冬至夜 |
| 二一七 | 万物秋霜能壞色四時冬日寂彫年 | 白 | 歲晚旅望 |
| 二一八 | 清洛曉光鋪玉簾上陽霜葉剪紅綃 | 劉禹錫 | 初冬 |
| 二一九 | 煙波半落新沙地鳥雀群飛欲雪天 | 同上 | 同上 |
- (但し、引用は甲本、番号は金子氏翻刻本に倣い、乎古止点、返

点、送り仮名は省略した。なお白は白樂天を指す。)

とあるが、松本では二一八・二一六・二一七・二一五・二一九の順に並んでいる。金子氏によれば（註6）

作者名を前後倒錯せるもの例へば、卷上、冬興部二一七・二一八・二一九に、（以下右の本文記載、今省略）とあって、「煙波云々」の一聯も亦、恰も劉禹錫の作たるかの如く見えるが、さきにも言及しておいたやうに、これ実は一首を隔ててある「白・歲晚旅望」とある詩句の後聯なのであるから、「清洛云々」の一聯の注記と共に、前後置換へられる時、こゝに始めて正しき位置に復することとなるのである。

とされる、つまり二一九は二二七の後聯なのである。松本にしても正しい並び方ではないので、これのみでは他の本との優劣は決し難い。

三

第二に、乎古止点について。松本には全巻に亘って乎古止点が施されているのに対して、乙本にはそれがない。この点について、前掲の跋文にいう榊原忠次が京都の書肆から出た本を筆吏に写さしめる際に省いたか、或は林春斎が忠次の本を写す際に省いたかのいずれかということが考えられるが、前者の可能性については、親本に乎古止点があったとしたら、書写を命ぜられた筆吏が恣意で省くということとは考えにくいし、又 榊原本に乎古止点があったのを、それを借りた林春斎が意識的に省いたとしたら、何らかそのことにつ

いて跋文中にことわるはずであるにもかゝらず乙本の跋文に、そういった記載が全々見えない。察するに京都の書肆から出た宸翰本に既に点がなく、榭原本、乙本はそれを写したにすぎないのであらう。

次に川口久雄氏が現存三本のうちで最善本とされている甲本と松本とを、乎古止点に関して比較してみよう。前述したように、松本が全巻に亘って乎古止点が施されているのに対して、甲本では四三七番、すなわち「経過」部の終わりまでしか施されていない。その原因については、明らかにし難い。今、四三七番までを比較してみると次のような結果が得られる。

一。点

松本にあって甲本にない個所六四。

甲本にあって松本にない個所四。

。点と・点のちがい六個所。

点の位置のずれたもの一個所。

二。朱点（星点）

松本にあって甲本にない個所九三。

甲本にあって松本にない個所二七。

二本ともにあって両者に異なる個所四二。

その最後の例を二、三挙げると、

三三、西施顔色今何在……

松本では「施」に、字の中央部に点が施されているのに対して、甲本では「施」の直下に施されている。江家点によれば前者は「ノ」の点、後者は「ス」の点で、こゝは「西施ノ顔色」と読み下すべき

で、松本の点が正しい。

九二、楊柳花飄新白雪……

松本では「飄」の直下に点があり、「新」に「ナル」という送り仮名が施されているのに対して、甲本では「飄」には点がなく、「新」に「ナリ」の点が施されている。こゝは、松本、甲本共通の点をも考慮して読み下すと、「花は飄ス新ナル白雪を」となるべきで、松本の点が正しいことになる。

二七七、莫對月明思往事……

「思」に対して、松本では右上隅に点が施されており、甲本では右の中央部よりやや上部に点が施されている。前言は「ヨ」の点、後者は「コト」の点である。こゝは、両本共通の点をも考慮に入れて読み下すと「往事を思コトなかれ」となり、甲本の点が正しい。

（引用は松本によったが、声点・乎古止点・送り仮名・返点などは省略した。）先に掲げたように、四三七句（一句七言の二聯、すなわち十四字）中、松本と甲本と異なっている所はわずかに四二個所である。この四二個所を、右にその一部を示した如く、江家点に菅家点を補って読み下し、松本と甲本との正誤を検すると、次の結果を得る。甲本の方が正しく読まれている個所は一八、松本が正しく読まれている個所は二四で、松本がやゝすぐれている。しかし全体の乎古止点からすれば、その差はきわめて小さなもので、このことから、両本ともに原型の乎古止点をかなり忠実に伝えているということが言えるのではないかと思われる。川口氏は甲本について、

本文の文字に古体漢字をつかい、訓点も平安朝の古色をつた

えるようで、唐詩なかんずく白詩がどのように訓まれていたかを知り得る貴重な一資料である。(註7)

と述べておられるが、このことは松本についてもそのまゝあてはまるであろう。

次に句数について比較してみよう。甲本が松本より一句少ない。七一〇がないのであるが、今、その前後をこゝに掲げてみる。

七〇八 坐久欲醒還酩酊夜深監散更踟躕

(註8)

白
夜寧靜後

七〇九 玉殿笙歌宜此夜更看明月照高樓

德宗皇帝
秋夜

七一〇 蠟炬燒殘銀燭灰羽騶飛急玉山傾

方干
同諸先輩遊泛鑑湖

逃夜室

(引用は松本による。たゞし、平古止点・返点・送り仮名などは省略した。七〇九の終りの「」は甲本の丁数の変わり目を示す。)

このように、正しくは七一〇が丁の最初に來べきところ、七一〇の次が「逃夜室」となっているため、甲本の親本が七一〇で丁変わりになって、次の丁の最初が「逃夜室」になっていたのを、甲本では丁変わりになるにもかゝらず、写本の形態にひかれて七一〇を書き落したのである。しかしこのことは、諸本間の重要な差異にはなるまい。

四

以上、松本と乙本、甲本について特徴的な部分に対する比較をこ

ゝらみた。以下では、これに念のため、上本を加えて、四本間の比較検討をこゝらみる。まず欠字の有無について考慮してみよう。その数について見てみると次の如くである。

(4) 本文に關して。

松本と甲本とは欠字はない。乙本は一個所、上本は六個所に欠字を有する。

(4) 詩題と作者名の記載に關して。

それぞれの諸本独自の欠字についてみると、松本には一個所しかないのに対して、甲本には八個所、乙本には四個所、上本には九個所あり、上本に一番多い。

(4) 部門別の題に關して。

甲本に、他の三本では六四五番の前にある、「露荷イ有此題」という部分が落ちてゐる以外には、欠字はない。

次にこれらの欠字の在り方について考察する。註目すべき部分として次の様な個所を挙げることができる。まず甲本において、三〇五と九三八との詩題と作者名とがすべて欠けていることである。これは共にその前後が明確に書かれてゐるところからみて、書写者がうっかり書き落したとは思われず、甲本の親本に既にその部分がなかったと考えるのが妥当である。次に、同じく五九についてみると、五九は、

喻覺繼

送 孝廣及

第婦彭澤

となつており、第二行に他の三本にある「歐陽」の二字が欠けてい

ることを明示している。これは親本が既にこうであつたか、或は親本のこの部分の字形不明のためのどちらかである。さらに三八四では「韓」とあるべき所、偏のみしか書かれていない。この現象は甲本のみでなく、上本にもみられる。本文六一六・六四四で、ここはそれぞれ他の三本では「煙」「託」とあるところ、上本では「火」「託」という如く、偏のみしか書かれていない。

この上本と乙本に特徴的な個所として、七一五の詩題の欠字を挙げることができる。七一五は、松本・甲本には、

：楊工部欲到与工部有數水之期……（傍点筆者）

とあるところであるが、乙本では「水ノ期」とあり、「之」が「ノ」に置き変わっている。上本では「水期」となつて「之」が完全に落ちてゐる。本来「水之期」とあつたのを乙本系に属する伝写本（京都の書肆から出た本、榊原本・乙本自身など）のどこかで、書写の間に「之」が書き落とされ、乙本の如く脇に小さく「ノ」と書き入れられたものであらう。上本ではさらに「ノ」が脱落している。上本は乙本の転写本だとは考えられるが、後述するように直接の転写本ではなく、その間に少なくとも一本が介在していると思われるので、この現象も納得できる。

以上、欠字に関するかぎりでは松本がもっともすぐれており、以下、乙本、甲本、上本の順になる。

五

次に、校合・異同の書き入れの有無について検討する。
書き入れの個所は、

(一) 本文 松本一九、甲本一九、乙本一四、上本六
(二) 詩題及び作者名 松本三〇、甲本二七、乙本一八、上本一五
(三) 部門別の題 松本四、甲本四、乙本五、上本二、
以上のように、松本、甲本に多く、乙本、上本に少ない。こゝで、それぞれの本独自の書き入れについて検討してみる。本文、詩題及び作者名、部門別の題を通じて、松本に二個所、甲本に六個所、乙本に一個所、上本に一個所ある。

一、松本について

本文一六六「紫閣岑西清渭東野煙深處夕陽中」（引用は松本。乎古止点その他は省略。以下特にことわらない場合は引用は松本による。）に「或无此詞」とあつて、この一句の存在を疑っている。又、本文一六七「風荷老葉蕭條綠……」の「荷」に「イ无」なる書き入れがある。

二、甲本について

本文一六六に「或元詩」、同じく一〇一二「數竿脩竹衡門裏……」の「脩」に「宿イ」なる書き入れがある。又、詩題及び作者名で三四八「浙江逢楚老侍」の「侍」に「持」、八七五「菩提寺上方眺眺望」の「望」に「イ无」、九一二「送蕭處士遊黔南」の「遊」に「イ无」、九三四「送馬舍人闍老往襄陽詩」の「詩」に「イ」とそれぞれ書き入れられている。

三、乙本について

詩題及び作者名の記載の三四九「曝布」の「曝」に「瀑」の書き入れがある。

四、上本について

詩題及び作者名の九二「張誇」の「誇」に「譌」なる書き入れがある。

以上の如く甲本に独自の書き入れが多いことが特徴的である。

これら四本の書き入れの中、注目すべきは、五〇四の松本と甲本との仮名の書き入れである。この本文は、

五〇四

死忌 ハコトハリナリ 老閑 ハミヤヒカナリ 生 イケル 也得 ハマダエタリ 擬 スル 將 モナモノナ 何 ワレマ 何 ゴロ 放言 ト

というものであるが、これに松本では「シナルモコトハリヨヒヌルモミヤヒヤカナリイキシイケルモマタエタリモノタヒテハヤツカリヨハイカハセラレムトスル」なる書き入れがなされている。(甲本は「ヨヒヌル」が「オヒタル」、「ミヤヒヤカ」が「ミヤヒカ」となっている他は松本と同様。)後述するようにこの句は返点の付け方に古点本の特徴を有する所で、前聯七句の読み方が、この句に施されている乎古止点、送り仮名を通して読める読み方とほぼ一致しているところから、この書き入れは原型の読み方をかなり忠実に伝えているのではないかと考えられるのである。次に、松本以外の三本には異本の校合書き入れを誤って本文化している部分がある。それは、本文の「三三」詩題及び作者名で、六一〇、六一三、部門別の題二個所に見られる。「三三」では「イ櫨」を甲本、乙本、上本が、六一〇では「イ柳」を乙本と上本が、六一三では「イ柘」を乙本と上本が、部門別の題においては「三月イ」を上本が、同じく「八月」を上本がそれぞれ本文中に繰り込んでしまっている。右の現象は当然これら諸本の松本に比して劣ることを物語るものである。

以上の結果を要約すれば、本文的優劣は松本・甲本・乙本・上本の順位となろう。

六

次に、四本間相互に使われている異字について考察してみる。

まず、それぞれに使われている独自の異字について、その数を調べると、

(イ) 本文 松本三、甲本一一、乙本五、上本二七

(ロ) 詩題及び作者名 松本一九、甲本一六、乙本四、上本一四

(ハ) 部門別の題 松本ナシ、甲本一、乙本二、上本三

という具合になり、本文および部門別の題では上本が最も多く、松本と乙本に少ない。詩題及び作者名では松本は一九個所と四本中最も多くの異字を有するが、このうち「蝦」が四個所、鰯が一個所というように虫偏に書写する書写音の癖の現われている所を除外すると、一一個所になる。この独自の異字のうち、正しい字を伝えているものについて考えてみる。

一、松本

(イ) 本文

一八五 薄陽江色潮添満……

他の本では「薄」の所が「尋」となっているが、これでは意味が通ぜず、松本が正しい。

一〇六八 夢中説夢兩重々

「兩」が他の本では「雨」となっているが、通行本白樂天集によれば雨ではなく両で「夢中に夢を説くことは即ち虚言である」(註

9)の意となる。

(ロ)詩題及び作者名

三〇三、三五三、三八二、八九六の狐はすべて「令狐相公」の「狐」であるが、これは「狐」が正字で、他の三本の「狐」は誤りである。

九三七 送陸甘一及第婦

他の本では「第」が「弟」になっているが、それでは意味が通じない。

二、甲本

(イ)本文

四一〇 盤鸞雷 驚尚未飛

他の本では「雷」が「雪」となっているが、こゝでは、「雷」が鳴って春を告げても尚飛翔することができない(註10)の意で雷が正しい。

(ロ)詩題及び作者名

三九八 喜劉蘇州思賜金紫遙想賀宴以慶之

他の本では「慶」が「度」になっているが、「度」では意味が通じない。

九二二 他の本では元名とあるところ、甲本は无名になっている、これが正しい。

三、乙本

(イ)本文

一七五 雨三行雁帖雲秋

「雨」は他の本では「雨」となっているが、こゝは雁の飛んでいく

形容で、雨では意味が通じない。

(ロ)詩題及び作者名

三七二 天恐文章渾斷絶還生賈島在人間の句を白樂天とあるのを韓愈に正している。

四、上本

本文二五個所中正しい記載と考えられるのは一個所もない。詩題と作者名の記載では三七二を韓愈としているところのみが正しい記載である。

次に、二本間に共通に使用されている異字について考察してみよう。第一表に示したような結果を得る。

(第一表)

			松		松
		甲		73	甲
	乙		66	72	乙
上		84	42	36	上

(但し、「松」は「松平本」・「甲」は「内閣本甲本」・「乙」は「内閣本乙本」・「上」は「上野本」)

表の数字が示す通り、松本は、甲本と乙本とにそれぞれ同じくらしい共通異字を有し、上本に対しては前二者の約半分の共通異字しか有しない。

ついでに、諸本の異字のうち注目すべき点に触れておく。まず甲本の本文七四、部門別の題上の「居」についてみると、七四は、「三春月照千山路」とあるべき所が「三春春千山路」となっており、部門別の題では、「閑居・閑意」とあるべき所が、「閑居・閑居」となっている。これらはいずれも、すぐ上位にある字に引かれて犯した誤写と考えることができ、甲本が他の本に劣る部分である。次に九五三と九五四の詩題についてみるに、これらは共に賀蘭遂の作品であるが、乙本と上本は、松本、甲本と逆に題が入れ替わり、且つ簡略化されている。

以上の結果をまとめると、

一 独自の異字は本文と部門別の題において松本が一番少なく、次いで乙本、甲本、上本の順になる。しかし、詩題及び作者名の記載においては、松本が一番多く、甲本、上本となり、一番少ないのは乙本である。

二 ただし、そのうち正しく記載されている比率は松本が最大で、上本が最少である。

三 二本間の共通異字から判断すれば、松本は甲本と近く、上本に最も遠い。

四 甲本では本文七四、部門別の題に誤写がある。又、九五三と九五四の詩題の記載は乙本、上本が杜撰である。

以上のようになり、相対的に松本のすぐれていることが証される。

七

次に送り仮名と返点について述べる。送り仮名は、乙本には一五

個所、上本にはわずか六個所にしかなく、この六個所は、乙本の一五個所中にすべて含まり、又乙本の一五個所は松本、甲本とすべて共通であるから比較の対象にはなり得ない。したがってこゝでは、この二字を除いて、松本と甲本との比較をこゝろみる。二字間で異なる個所は二〇七で、そのうち松本にあって甲本にない個所一〇八、逆に甲本にあって松本にない個所一四で、それらを除いた二本ともにあって両書に異なるものを抜き出したのが第二表である。

(第二表)

松 甲 数	例	松 甲 数	例
ハ→ワ七	農タハム→タワム	ヨ→オ八	起ヨキ→オキ
エ→エ二	越コエテ→エ	キ→イ二	薛ヘキ→ヘイ
ヘ→エ二	断ヘ→エ	カ→コ一	構カウ→コウ
ア→ハ一	匹→如スルスアナル→ハ	サ→セ三	槍サウ→セウ
キ→ヒ一	一聲クサヨウ→ヒ	シ→ル三	噴フキイタシ→ル
ヒ→イ三	争ヒ→イ	ヘ→ハ二	了ヲヘヌル→ハ
ウ→フ一	臘ラウ→ラフ	ム→ン五	ネムコロ→ネンコロ
フ→ウ八	臘ラフ→ラウ	ム→フ二	カフムラシメ→フ
モ→ム一	釀カモ→カム	ル→リ二	邊レル→レリ
モ→ン一	釀カモ→カン	ル→レ四	話カタル→レ
ン→シ三	愁フラン→シ	ン→ル二	別セン→セル

(但し、「松」は「松平本」・「甲」は「内閣本甲本」・)

○松本の方が詳しく仮名を施してある個所一六。

○同字に異なった仮名を施したものの二個所。

笑エム(松)→アヘム(甲) 閑ナカラ(松)→カテラ(甲)。

以上の点について、例えば大坪併治氏が最近整理されたところによると(註11)古点本にみえる送り仮名の特色として、

一 ハヰワの混同は弘仁・天長頃からあり、

二 ヲオの混同は平安初期にはじまり、

三 エヰエ、ヘヰエ、の混同は平安中期に現われ、

四 井ヰヒ、ヒヰイの混同は平安中期の初めに現われ、

五 ムヰフの混同は平安中頃に止まる。

などを挙げておられるが、この松本と甲本には、こうした特色の形跡の一部を伝えている。

次に返点について検討する。返点は、乙本と上本に二個所、共通の場所に施されているのに対して、松本では本文中に二二一個所、詩題に二〇個所、甲本においては、本文中に一七九個所、詩題に七個所施されており、上本と乙本の二個所はこれの中に含まれてしまふ。さて、この松本と甲本の返点の中には、既に述べたように古点本の特色を有する所がある。

やはり大坪併治氏が整理されているところによると(註12)、古点本の特色として、

○後世は、数字は文字の左下に書くが、古点本では、左右いづれにも書き、かつ文字の中ほどに書くのが普通であった。(一〇頁)

○後世は、数字は返る必要がある場合しか用ゐないが、古点本では返らない時でも、読み順を過まらないために書くことがあった。したがって、四三二一と並ぶはずのものが、一二三四、一三二四、一四二三、四三一二など種々な配列を取るようになった。(一一頁)

○後世は、二重に返る場合は、小返りは数字で、大返りは上、中、下で示すが、古点本では、上、中、下を用ゐず、数字を四二二三といふやうに配列して表はすことがあった。(一一頁)

○後世は、一字づつの場合ハレを、二字以上の時に数字を用ゐるが、古点本では、字数に関係なく数字を用ゐた。(二三頁)

○多くの時間をかけ、徹底的に文意を追究しようとする場合には、表記は極めて詳密となり、幾通りもの読み方や解釈が煩を厭はず書き記される。(三一頁)

などを挙げておられるが、松本と甲本からこういった特色を有する部分を抜き出すと、前者には三八個所、後者には三七個所あり、両者に異同のある個所は次表の如くである。

(第三表)

松 本 本							
437	422	373	250	95	42	29	26
不	被	應	無	不	莫	遣	暮
三	二	三	三	一	三	三	タ
		縁	如	飛		開	ム
		二	此			花	ハ
甲 本							
437	422	373	250	95	42	29	26
不	被	應	無	不	莫	遣	暮
三	二	三	三	一	三	三	タ
		縁	如	飛		開	ム
		二	此			花	ハ
松 本							
851	741	648	540	483			481
未	娥	恒	無	老	得	所	應
三	二	二	二	三	三	三	三
勝	ハ	コ	無	為	作	求	無
		ウ		謝			
		レ					
甲 本							
851	741	648	540	483			481
未	娥	恒	無	老	得	所	應
三	二	二	二	三	三	三	三
勝	ハ	コ	無	為	作	求	無
		ウ		謝			
		レ					

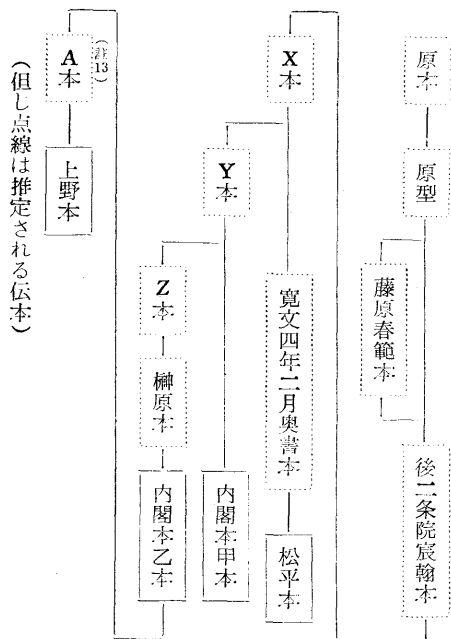
(但し○印を施した部分は、そちらが古点本的特徴を有する所、又
※印を下に付した返点は文字の中ほどに書かれていることを示す)

以上の結果を整理すると、その数においては、甲本が九、松本が六で、前者がまさっているが、その内容を検討してみると、甲本は八箇所、つまりそのほとんどは、数字を文字の中ほどに書くという特徴であるのに対し、松本は幾通りもの読み方を施したもの、レ点の所を数字を用いたもの、読み順を過まらないために数字を施したもの、などがあり、その意味からすれば、松本の方がより多く、古点本的特徴を伝えているといえる。

以上に見て来たように本文の比較検討により、松本が奥書その他から見て乙本、或はそれによって推定される榊原本と近い関係にあると考えられたことは否定され、それとは系統を別にする一本であることが推定される。

八

終りにこの四本から推定できる千載佳句の系譜を組み立ててみよう。



原本、原型、藤原春範本、後二条院宸翰本までは四本共酒の奥書によって推定される。後二条院宸翰本は六呂二年(一三〇〇年)十

二月十一日に藤原春範本を以って校合された本である。X本、Y本、Z本は全くの推定本で、X本は後二条院宸翰本をそのまゝ伝えていると思われるもの、つまり、乎古止点、返点、声点、送り仮名、校合が施されているもの、現存本の松本にその跡をとめていると考えられるものである。Y本は、現存本の甲本にその跡を伝えていると思われるもの、つまり、乎古止点が途中まであり、返点、声点、送り仮名、校合などの施されている本である。次にZ本は、乙本のもとの形を伝える本、無点本である。禰原本は乙本の林春斎の跋文から推定される本で寛文四年（一六六四年）春四月に写されたもの、「寛文四年二月奥書本」は松本が転写本である場合の親本である。この寛文四年二月本や又その親本が、果して、何れの所蔵本であったものか、しばらく不明とする外はない。

註

- (1) 平安時代と白氏文集——句題和歌・千載佳句研究篇（培風館刊）
- (2) 平安朝日本漢文学史の研究 上（P483～P484）（明治書院刊）
- (3) 肥前島原松平文庫 中村幸彦・今井源衛・島津忠夫「文学」一九六一・一一
- (4) (2)に同じ。
- (5) (3)に同じ。
- (6) (1)（P541～P542）
- (7) (2)に同じ。
- (8) 内閣本甲本では「臨」
- (9) 続国訳漢文大成一二卷 白楽天詩集四
- (10) 続国訳漢文大成一〇卷 白楽天詩集二

(11) 大坪併治「訓点語の研究」（P45～P101）

(12) (11)に同じ。

(13) 乙本と上本の間にA本という推定本を挿入したことについて触れる。既に述べたように、川口氏は上本を乙本の転写本だとされているが、これについては若干の検討を要する。体裁はともに二冊八行本、奥書が共通、句数も同じである。たゞし、乙本には奥書の後に半丁分の余白があつて、七九〇、七九一、七九二の句が記されている。すなわち、

七九〇 聞有酒時酒楽飲不悶身事莫思量

白 二月五日花下作

七九一 能銷忙事成閑事轉得憂人作樂人

白 家醞

七九二 更憐家迎春嬖一醺醒酬待ノ一

（七九二）こまでしか書かれていない。以下、待我婦白將婦と続く。）

上本にはこの部分はない。又、ともに声点、乎古止点がなく、返点は二箇所のみで兩本共通、九四三の「分」という字の欠字も共通である。送り仮名は乙本では一六箇所、上本には六箇所しかないが、この六箇所はすべて乙本の一六箇所の中に含まれてしまう。これらから判断すれば、上本は乙本からの直接の転写本と考えてもさしつかえはないが、しかし、次に述べるような明瞭な相違点から考えると、すぐさまそう考えることに躊躇を感じざるを得ない。

一、欠字について。乙本では本文の欠字一、詩題と作者名の欠字三に対して、上本では、本文に六、詩題と作者名の記載の

部分に八個所の欠字がある。

二、校合・異同の書き入れについて。乙本文にあって、上本にない所二個所、詩題と作者名の所では、乙本にあって上本にない所二個所に対して、逆に乙本になくて上本にある所が二個所ある。それは九二一「張誇」の「誇」に「謬」とあるものと、九五〇「李潭」の「潭」に「澤イ」とあるものである。三、異字について。二本間に、(イ)本文では二四個所、(ロ)詩題と作者名においては一〇個所、(ハ)部門別の題では五個所に異字がある。(イ)においては例えば、五三、乙本では「花」とある所、上本では「家」、七一八、乙本で「酒」とある所、上本では「前」、(ロ)においては、四六九、乙本では「志」とある所、上本では「意」、九二〇、乙本で「逸」とある所、上本では「送」、(ハ)では、乙本に「境」とある所、上本で「地」となっている所などが、その代表的なものである。

このように細かいところでかなりの相違点が見られる。こういった違いは、両本が直接の關係にないことを物語る証拠である。以上の相違点から、上本は乙本の転写本であるとしても、直接写したのではなく、両者の間に少なくとも一本が介在すると思われるのが妥当であろう。

付記

平古止点に関しては、具体的に点を示すべきであるが、印刷不能のため、前述の如き大ざっぱな記述にせざるを得なかった。

これは、五月一九日の九州大学国語国文学会總會において発表し

たものを、春日和男・今井源衛両先生の御教示を得て稿に改めたものである。なお、P 28 の上段は本文巻頭、下段は巻末の写真である。

本研究は昭和三十八年度文部省科学助成金(総合)によるものの一部である。

紹介

伊藤伊勢男著『源氏物語論者―発想を中心に―』

本書前半部は、一「源氏物語の草子地を中心とする物語の方法」二「源語の作者の『ものあはれ』の享受と詠嘆的詩的表現」三「源氏物語の叙述と、紫式部日記冒頭の風景描写について」の三篇の論文より成り、後半部は昭和二十八年以降の源氏物語・紫式部日記関係文献目録を付載する。

一は、助動詞「めり」の草子地における使用方法をもとにして、紫式部は、伝統的な物語の枠を打ち破ったものとする。二は、作者の「もののあはれ」の享受とその表現等について述べたもの。三は、源氏物語の風景描写に現われる「唐突な叙述」を指摘し、この叙述における破綻こそ作者の「文学的理論の飛躍」であり、紫式部のすぐれた点であると論じている。(昭和三十九年一月三十一日、柳原書店刊。A5判、一三七頁)(金原 理)